ロンドンパラリンピック報告

日本ディスエイブルパワーリフティング連盟
国際部、吉田寿子

パラリンピックでは、試技の始まる前に、選手全員が紹介される。左から三人目、三浦選手。

歴史

1964年東京オリンピックの後に開催された障害者スポーツ大会で、パワーリフティング種目が採用され、第一回パラリンピックパワーリフティングは、東京千駄ヶ谷の国立競技場で開催されている。この時、日本選手も数名参加した、と記録にある。

その後、32年間、パワーリフティングはパラリンピックとは無縁であったが、1996年アトランタパラリンピックで福井県の大杉選手が日本代表に選ばれた。

その経緯は、当時、世界パワーリフティング連盟（IPF）とIPC（国際パラリンピック委員会）パワーリフティングとは友好関係にあり、審判の交流も盛んであった。1992年、台湾で行われた第一回IPF主催世界ベンチプレス選手権大会には障害者部門があり、それは2000年まで続いた。大杉選手は、1995年、このIPF世界ベンチ大会に、福井県のタケイパワージム代表の武井康弘さん等とともに出場し、この時出した大杉選手の記録がIPCの目に止まり、大杉選手にパラリンピック参加要請が来た。

大杉選手のパラリンピック出場を契機に、障害者ベンチプレッサーの間で、自分も、ぜひ、パラリンピックに参加したいという機運が生まれた。一体どうしたら、パラリンピックに行けるのか？

日本の障害者スポーツの統括団体、公益財団法人日本障害者スポーツ協会を訪問し、指導を仰いだ。まず、独立した連盟の設立が必須ということだった。

そこで、1998年ドイツで開催されたIPF世界ベンチ、障害者部門、67.5ｋｇ級優勝の中元伊知郎氏を中心に有志が集まり、日本ディスエイブルパワーリフティング連盟（JDPF）が立ち上げられた。1999年のことだ。

そして、中元理事長の元、2000年のシドニーパラリンピックで宮崎県の高橋選手の派遣が実現した。その後、吉田進に理事長が変わり、2004年のアテネパラリンピック（愛知、宇城選手）、2008年の北京パラリンピック（愛知、大堂選手）と、各一人ずつの選手を送ってきた。

以来、JDPFはパラリンピックへの下肢障害者参加、聴覚障害者のパワー参加、視覚障害者の国際大会参加を目指し、活動を続けている。

ガンバレ！名古屋市長の激励をうけた名古屋市在住のパラリンピック選手（右から、宇城選手、大堂選手）

参加資格

パラリンピックパワーリフティング（パラ）に参加できるのは、今の段階では、下肢障害者部門だけだが、今、リオに向けて視覚障害者部門を設けるべく鋭意奮闘中だ。

パラに参加するには、クラス分け、といって、専門のドクターによって、「確かにパラリンピックに参加出来ますよ」という、障害の程度を示す証明が必要だ。

これを「クラス分け」という。

日本では、パワーリフティング専門の国内クラス分けドクターは二人おり、日本で開催される大会前に、新しい選手は、必ずクラス分けを受ける必要がある。

パラに参加するには、国際クラス分けドクターの診察が必要だが、今現在、日本には、このパワーリフティング部門の国際資格を持つドクターはいないので、海外の競技会に出て行って、この、証明を取らなければならない。

クラス分けに合格した選手は、IPC パワーリフティングの認める大会に出場し、その記録を世界ランキングに登録する。

2011 年まで、IPF の国際審判員が判定した記録を、世界ランキング登録記録として認めてくれていたので、JPA 所属のIPF国際審判員の皆さんのご協力を得て、日本で開催した試合で、世界ランキング登録をすることができた。

それが、オリンピックとパラリンピックが同等の組織となり、パワーリフティングルールに IPC 本体が介入することが多々起こり、残念な事に、IPF国際審判員の判定は認めない、という決定が IPC によってなされた。

そのため、日本の JDPF 所属選手は、パラを目指すためには、海外の試合に出て行かなければならないという状況が生まれてしまった。

そして、この世界ランキングから、トップ10人がパラ代表に選ばれ、あと2名は、ワイルドカードといって、誰も選手がいない国等から選手が選ばれる。

ロンドンパラリンピック

JDPFでは、過去三回、一人ずつの選手をパラリンピックに送ってきたが、複数の選手をロンドンへ送ることを目標に、この4年間、合宿・国際派遣・海外優秀コーチや選手の招へい、など、様々な角度から選手強化をはかってきた。

その結果、3名の選手と1名の監督をロンドンパラに派遣することができた。

ロンドンでは、選手村に着くや、パワーリフティングの選手は全員がドーピング検査を抜き打ちで受けたそうだ。三浦選手の話では、疲れて、眠りについた午後１１時頃、検査員が選手村の部屋にやって来て、ドーピング検査の採尿が行われたそうだ。

その中で、ブラジル（利尿剤）、ジョージア（ステロイド）が尿検査で失格となり、ロンドンオリンピックから正式に採用されることになったという血液検査で、ロシアの選手が２名、成長ホルモンで失格となった。

試合の始まる前に、参加を拒否された選手が４名もいたことは、本当に残念なことだ。

更に、試合終了後も、上位３人に加えてランダムに再びドーピングテストが行われ、ドーピング検査は厳格を極めた。

パラリンピック開会式、入場する日本選手団

日本の大堂選手や、宇城選手はロンドンでは二回もドーピング検査を受けた、と、話している。選手村には、ドーピング検査専用ビルがあり、24 時間体制で、分析が行われたと聞いている。

今回、日本からのパワーリフティング参加者は；
監督、石田直章（名古屋芸術大学教授）
選手、
４８ｋｇ級　三浦　浩（バークレイズ証券株式会社）
７５ｋｇ級　宇城　元（株式会社サガミチェーン）
82.5ｋｇ級　大堂秀樹（愛知玉野情報システム（株））

選手は、三人ともに、出発間際まで、体調が完全ではなく、選手村滞在の一週間でなんとか体調を整えてほしいと、石田監督も現地で相当気配りをされたようだ。

パワーリフティングの会場は、エクセルという巨大展示場

選手村ではトレーナー、ドクターが体調管理の手伝いをしてくれることや、酸素ボンベ室で体をいやすことができたり、食事は、24時間食べ放題であったり、など、仕事で追われる日本にいるより、体調管理はやりやすかったかもしれない。

その成果だろう、三浦選手は、体調、体重調整もうまくいき、記録は117kgで9位となった。124kgの第三試技もほんのわずかではあるが、ぶれてしまい、失敗となったが次につながる試合結果となった。

パラでは各クラス１２名前後の選手が参加し、２グループに分かれて試合をする。スタート重量でトップ６名がAグループ、それ以外の選手がBグループとなる。宇城選手には、Aグループに入ってほしかったが、Bグループとなってしまった。安全をみて、176ｋｇスタート。これは、かなり軽く、きれいに上がったが、二本目の180ｋｇをまさかの失敗。本人も、180ｋｇでつぶれたことはここしばらく一度もなく、自分自身びっくりした、と、話していた。三本目には180ｋｇをしっかり取って、7位となった。

大堂選手は、181ｋｇでスタート。監督や同僚に体調がいまひとつなのだから、スタート重量を下げたら、と、アドバイスされていたが、大丈夫、絶対上げるから、と、舞台上へ。大堂選手は、Aグループに入れたので、Bグループの最高重量190ｋｇの二人をかわせば、8位以内入賞は、確実。慎重に、187ｋｇ-191ｋｇと三本成功で、6位という、JDPF史上最高の順位をマークした。リオでは、メダルを取りますから、と、大堂選手からは力強い言葉が聞かれた。

三人とも、最悪の体調から、最良の調整ができたことは、素晴らしく、見事な試合運びだった。

判定は、少しのぶれも許されない。三浦選手の試技をテレビで見ていた多くの人達は、124ｋｇの第三試技が何故、赤か分からない、と、帰国後言われた。会場で、生で見た時には、わずかなブレがあり、私も観客席にいたが、赤でも抗議のできない判定だった。テレビ映像では詳細な

ロンドン パラリンピック

福祉の先へサポート ⑦

企業や地域と縁結び

汗流す喜び 裾野広げる

双方にメリット

選手にプロ意識

ロンドン・パラリンピックに出場する選手を囲むパークレイズ証券の社員（6日、東京都内）

「がんばれ！」「メダル期待してるよ」。東京都港区のパークレイズ証券の会議室で8月16日、ロンドン・パラリンピックに出場する社員の壮行会が開かれた。パワーリフティングの三浦浩（47）、車いすラグビーの島川慎一（37）と三阪洋行（31）。集まった約200人の同僚の激励に3人は笑顔で応えた。

3人は昨春に入社した。選考3日の事務仕事以外は練習に専念でき、「競技することが仕事」（同証券人事部）という。週末に代表合宿や大会などがあれば、平日に振り替え休日も与えられる。

ただ、五輪出場のトップアスリートですらスポンサー探しに悩む現状では、障害者アスリートが練習に専念できる環境づくりが重要。企業と選手双方にメリットのある末永い関係をつくりたい」と縁結びに奔走する。

障害者スポーツが発展するには競技人口の増加、裾野の広がりが欠かせない。

23日、高知市内のプールで「高知チャレンジドクラブ」が開いた水泳教室に10～70代の障害者11人が集まった。抱える障害は肢体欠損や知的障害など様々だ。

参加した伊藤龍太（23）は15歳の時に交通事故で脳を損傷し、高次脳機能障害に。3年前は水が怖く、泣きながら泳いでいたが、今では「水泳を通じ、『できる喜び』を学んだ」と笑う。バドミントンのほか、今年はスキューバダイビングにも挑戦した。

世界陸上の400mハードルで日本人初の銅メダルを獲得した為末大（34）は障害者アスリートとの交流を重ね、「プロ意識が感じられるような民間団体。障害者が水泳やバドミントン、テニス、卓球など23種目を地域で気軽に楽しめるプログラムを提供する。

さらに障害者スポーツの普及のため、小中高校や特別支援学校などにアスリートを派遣する教室や体験イベントを開催、地域住民らにも広報して参加を促している。運営スタッフの片岡優世（31）は「ほとんどの種目で障害者と障害のない地域住民が一緒に汗を流している」と強調する。

同クラブは高知県立障害者スポーツセンター（高知市）に事務所を置く民間団体。障害者が水泳を通じ、「今後は五輪のトップアスリートらと共同歩調をとって発信力を高めることが重要だ。魅力が伝われば障害者スポーツの競技人口は増える」と力説する。

「広く普及させるためのパラリンピック日本代表の環境整備はまだまだ足りない」と訴えるのはパラリンピック日本代表のチームドクターを務めた中村太郎（51）。「トップアスリートへの支援だけでなく、下支えする裾野を広げていくことが大切だ」と話している。（敬称略）

練習が仕事障害者スポーツ界にも、そんな動きが徐々に出始めている。（資料；（株）つなひろワールド、竹内）

バーの動きが完全には、伝わらないのかもしれない。厳しすぎるのでは、と、様々な人に意見を求められたが、それが、IPCパラリンピックの判定だ。

だが、日本選手でいえば、三浦選手は３本の内１本失

堂々と試技をし、自負に満ちたガッツポーズの三浦選手（資料；毎日新聞）

「裏方」三浦 主役の試技

パワーリフティング

最終3日目の試技、自己ベストを1キロ上回る124キロに挑んだが、失敗したが、三浦の顔は晴れやかだった。2度目の試技で挙げた117キロで、男子48キロ級9位。「今日は僕がピン（主役）を張らせていただいた」。長い選手生活から、ステージに上がった身に大観衆は心地よかった。

東京都墨田区の出身。中学時代から手ターに熱中し、高校卒業後に就職した会社を2年でやめ、音楽関係の専門学校へ。つてを頼り、フォークグループなどの全国ツアーに裏方として参加するようになり、長渕剛さんの全国ツアーには90年以降、同行してきた。

01年、松山市でのコンサートの後、トラックに機材を積み込む作業中、重量400キロのフォークリフトが倒れてきた。脊髄（せきずい）を圧迫して車いす生活になった。04年に障害者のパワーリフティングの記事に触れ、「400キロのものを支えられる体になりたい」と思った。長渕さんと一緒にジムで汗を流すようになった。

パワーリフティングは、下肢障害の選手がベンチプレスで競う。階級は体重で分かれ、障害の軽重は考慮されない。腹筋や背筋の利かない三浦は、48キロ級の中でも障害の程度は極めて重い。「同じ障害の程度の選手で争えば負けない」自負があるが、メダルが全てではない。「試技を成功後、おごりを胸の前で抑める姿は誇りに満ちていた。

「金（メダル）を取ってこい」長渕さんのはなむけの言葉には応えなかったが「また練習して、4年後を目指します」47歳。ゆっくりと、前へ。【藤野智成】

男子48キロ級1回目で112キロを成功しガッツポーズする三浦一祐選

敗。
　宇城選手は第二試技が上がらなかったことを考えると、上がった試技は全部成功。
　大堂選手は、三本成功。
　三人の選手は、海外で、何度も何度も、上げても失敗、これでもダメ？という経験を重ね、審判に白をもらえる試技を身につけてきた。
　とりもなおさず、練習を重ねた成果が３人ともにみられ、JDPFとしては、嬉しい限りのパラリンピック結果となった。

　海外の選手では、ナイジェリアが驚くほど伸びていた。聞くところによると、政府が二年前から障害者スポーツに力を入れ始め、仕事を与え、ふんだんな資金を用意して選手強化に努めてきたと聞く。その豊富な資金で、ナイジェリアは、パラリンピック前には、韓国に二カ月間滞在し、合宿を続けていたそうだ。
　韓国のインチョンで、二年後のアジアオリンピック、パラリンピックの開催が決まっている。オリンピック選手の為の施設は無論として、障害者スポーツ選手の為だけのナショナルトレーニングセンターも一昨年完成し、立派な設備の中で、障害者スポーツ選手は合宿を重ねていると聞く。
　ナイジェリアはこの施設で合宿を行い、男女合わせて金６，銀５，銅１合計１２個という成績をあげた。

　中国は、JDPFから７月に遠征して合宿を見せてもらったが、その成果は、確実に出ていた。中国選手は、全員メダルを獲得、男女合わせて金3、銀6、銅６合計１５個のメダルを獲得した。
　何よりも、その、正確無比な上手な試技には舌をまく。JPA感覚から言えば、胸の止めが短い、と、思われるかもしれないが、IPCルールは、一時でも、確実に静止すればよい。どんなに長くとめても、胸の上でバーがわずかでも揺れていると失敗を取られる。中国の選手の試技は、スーッとバーを胸おろして、ピタッと止め、一気に上げる、という感じで、これは大事と思われる試技を絶対に落とさないところなど、素晴らしいパフォーマンスだった。それに加えて、コーチの微妙な重量選択の上手さには感心するばかり、学ぶべきところがまだまだある、中国チームだった。

　二年前に日本に招へいした、エジプトのオマール選手は、女子５６ｋｇ級で143ｋｇの世界新記録をマークして、優勝した。

審判

　私は、今回、審判員として、日本代表ではなく、IPC側から参加した。
　審判は、毎年数回、突然IPCから指名が来て、どこどこへ審判に行け、と、言われ遠征をする。一回の遠征は10日以上になるので、なかなか、日本のサラリーマンには、厳しいところだ。
　基本的にIPCの審判は、その国のオリンピック委員会

コスチュームチェックは、入念を極めた。特に、スポンサー以外のマークが外に現れないよう、慎重に、と、審判員は指導を受けた。

上、宇城選手、180ｋｇを挙げて、ポーズ。
中、大堂選手のアップ。見まもる石田監督。
下、観客席は、常に満杯

の職員という人が多く、遠征そのものが仕事になっている。

私自身は、パワーハウスのコーチ陣に助けられ、なんとか、IPC指名大会の審判をこの4年間務めてきたので、今回、パラリンピックの審判に指名された。

一方、吉田進は、どことどこの大会で一日早く帰ったという理由で、審判を外されてしまった。

本当は、日本でも、IPC国際審判員の養成が必要なのだが、自由に時間の取れる人の少ない日本では、IPC審判受験をしませんか、とは、とても気楽に言えないのが実情だ。

英語に堪能で、年に何回かの遠征が出来て、パワーリフティングを熟知している方、ボランティア活動としてのIPC国際審判員取得を希望していただける方は、是非、ＪＤＰＦにご連絡頂きたい。

オリンピックパーク

オリンピックパークは、スタジアム、プール、様々な競技場や選手村などが広大な土地に集まっている。ここは、元は一大工場地帯だったそうで、人々はほとんど住んでいなかった所らしい。

そこに、オリンピック後はマンションとなって、売り出すという約１万人余りが収容できる緑豊かな選手村アパートが林立している。

オリンピックスタジアムも、８万人収容できる巨大スタジアムから、オリンピック後は５万人収容のスタジアムに変身するらしく、オリンピック後は、イギリススポーツの中心公園、ロンドン郊外の住宅街となるそうで、いわば都市開発の一環として、オリンピックが招へいされたようだ。

日本でも、2020年に東京がオリンピック・パラリンピックを招聘しているが、オリンピックパークや選手村を作れる広大な土地があるのかどうか、帰国したら、早速、招聘計画をみてみたいと思う。

長期合宿

私達JDPFは、「合宿」、を実施しているが、二泊とか一泊で全国各地から選手が集まり、情報交換をしたり、一緒にトレーニングをしたりして、お互いに成果を見せあっている、と言うところだ。日常的には、全国各地のジムや自宅でトレーニングを重ねている。

JPA所属の選手も同じだと思う。いままで、それで、世界で戦ってきて、特に、合宿の必要性を感じていないのが、日本の現状だと思う。

一方、エジプト、ナイジェリアや、中国、韓国そのほかの多くの国々は、各国の強化選手に指名されると、合宿所に入り、ほぼ一年あまりも一緒にトレーニングを重ねている。それには、それらの国に、障害者スポーツ競技者専用のトレーニングセンターがある事、合宿所に入っている何カ月もの間の給料や生活は政府が保証してくれるという素晴らしい制度があることに支えられているのが基本だ。

だが、それにしても、長期間一緒にトレーニングをす

やっと、そろった日本選手。役員と選手・監督は隔離されており、なかなか、顔を合わせることが出来ない。

ることで、それほど、選手強化がはかれるものなのか、それは、なぜなのか、パワーリフティングは個人種目であるので、JPAの選手のように、日常的には、地元のジムで練習を重ね、時々の合宿で情報交換すれば、十分ではないか、と、パラリンピック中に考えていた。

帰国後、オリンピックの金メダリスト、水泳の鈴木大地選手が毎日新聞のスポーツ欄で、コラムを書いているのを見つけた。

「オリンピックでは、今回団体種目の活躍が目立った。サッカー、バレーボール、フェンシング、卓球、アーチェリー、競泳のメドレーリレー。これらの活躍を見ていると、日本人は個人として戦うよりも団体の一員として戦う時の方が力を発揮するのではないかという、仮説を立てたくなる。

例えば、自分自身も、１００メートル背泳ぎとメドレーリレーの第一泳者として同一種目を１大会で２度泳いだ場合、どちらかというと、メドレーリレーの時の方が、自己記録を縮めることが多かった。日本では、ナショナルトレーニングセンターが建設され、合宿などを通して競技の垣根を越え、選手同士の親密さが増した。これが、「チームニッポン」の意識の高まりとなり、アテネ以降、メダルが量産されている。

農耕民族である日本人は、古来、仲間とともに大地を耕し農作物を育てて、生活を営んできた。集団の一員であるという意識をいかに強く持たせながら戦うか。日本人の潜在能力を引き出すカギが隠されているのかも知れない。」

―――どうだろうか。団体競技には長期合宿が有効であることは容易に分かるのだが、個人種目でも、日本人だけでなく、ナイジェリア等も、長期合宿を重ね、仲間意識を高めることで、北京の時とは、比べ物にならないくらいの力を発揮できたのだろうか。

いずれにしても、まだ、日本には障害者スポーツ専用のナショナルトレーニング施設はなく、障害者スポーツ選手が長期にわたる合宿を続けるのは、場所的にも、資金的にも、各自の仕事等の事情からも、難しいのが現状だ。

東京都北区の味の素ナショナルトレーニングセンターは、最新の設備、器具を備えた素晴らしいスポーツ競技環境の整った施設だが、ここは、オリンピック選手の為だけに建てられており、障害者スポーツ選手がこの施設を使用することは、今の所できない。

様々な働きかけがなされ、なんとか、これを使わせてもらえないかという動きはあるものの実現には至っていない。

それは、オリンピックが文部科学省の管轄下、障害者スポーツが厚生労働省の管轄下にあり、この味の素ナショナルトレセンは、文科省によって、建設されたもので、監督省庁が異なると、使える施設もまた違う、ということらしい。

日本にも障害者スポーツ専用のナショナルトレーニングセンターの建設！そのような夢は、かなうのだろうか？

２０２０年の東京オリンピック・パラリンピック開催がもし、決まれば、ひょっとしてーーー。

いずれにしても、下肢障害者部門については、リオでのメダル獲得を目指し、JDPFはJDPFなりの選手強化を重ねていかねばならないという、大きな課題がある。

と、同時に、視覚障害者パワーリフティングのパラリンピック入り（できれば三種、難しければ最初はベンチのみ）の様々な働きかけへの協力をしていくこと、聴覚障害者の方々のパワーへの参戦、等、様々な取り組みが要請されている。

最後に、ロンドンパラリンピックにJDPFから選手を派遣し、大きな成果を出すことができたのは、公益財団法人日本障害者スポーツ協会の大きな支えと後押しを頂いたお陰であることを報告し、JDPFの選手に、何物にも代え難い、暖かい応援を下さった多くの皆さんに、心からの感謝を申し上げたい。

ありがとうございました。